

潮 流

エスタブリッシュメントの敗北

代表取締役専務 柳田 茂

11月8日に行われた米国大統領選挙は、事前の予想を覆して共和党のトランプ候補が勝利した。直後の各国のマスコミ報道は、「驚くべき番狂わせ」、「史上最もありえない選挙結果」といった表現が多く、世界中に与えた衝撃の大きさが露呈された。

こうした結果となった要因について様々な分析が行われている。米国がポピュリズム（大衆迎合主義）の罠に陥ったという見方もあれば、選挙人の数の多い激戦州に集中的に働きかけた選挙戦術の勝利との見方、あるいは大詰めの段階でのFBIのクリントン候補への新たな調査表明が命取りになったと見る向きもある。いずれも一概に否定はできないが、表層の要素のみに注目して、今回の選挙の底流に流れていた米国民の大きな意思の変化を見逃してはならないだろう。

私見としては、今回の選挙結果は、マスメディアが想像していた以上に米国民の既存の政治体制への不満と怒りが大きく、トランプ候補に賭けるリスクを冒してでも変化を求めた帰結であると考え。そして、米国民が求めた変化の方向は、加速するグローバリゼーションにストップをかける米国第一主義・保護主義であり、新自由主義経済により拡大した国民間の格差の是正であった。

今回の選挙では、これまで民主党の強固な支持基盤であった北部のペンシルベニア州やウィスコンシン州などの白人労働者層（ブルーカラー）が雪崩を打ってトランプ候補支持に転じた。これらの州は、鉄鋼や自動車をはじめとする米国の伝統的な工業地帯であるが、近年はメキシコや日本・韓国・中国等との競争に敗れ、工場労働者の失業が相次ぐ状態となっていた。彼らにとって、NAFTA（北米自由貿易協定）見直しの公約を反故にしてTPPを推進するオバマ大統領への失望は大きく、その継承者にしか見えないクリントン候補には期待できなかったのであろう。その意味において、トランプ氏が自らの当選を「労働者の勝利」と述べたのは当たっている。

これに対し、グローバル経済における勝ち組である富裕層・ホワイトカラーが集まるニューヨーク・ワシントン等の沿岸都市部は最後まで圧倒的にクリントン候補支持であったが、彼らは予想だにできなかった敗北にまみれた。選挙当日、開票が始まってもおおクリントン優勢と報道していたマスメディアも含め、今回の選挙は米国の支配層（エスタブリッシュメント）の敗北と言ってよいのではないかと。

今後の注目点は新政権がどのような政策を行うかであるが、極めてしたたかでクレバーな次期大統領は米国第一主義・保護主義を掲げながらも、安全保障、外交、経済のいずれにおいても現実的かつ功利的に立ち回っていくと予想される。

その意味においては過度の不安は不要かもしれない。しかし、トランプ勝利の最大の原動力となった米国の人種・移民問題や格差問題の根は深く、こうした国民の間の亀裂は今回の選挙戦を通じてさらに広がってしまった。トランプ次期大統領が国民分断の危機を乗り越えて、自らが否定したグローバリゼーションに代わる新たな米国の方向性と国民を統合する普遍的価値観を示すことができるのか、歴史はいま大きな転換点を迎えている。